



Title	複雑労働論補遺:W.リーブクネヒトおよびO.パウアーの所説によせて
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 31(2), 25-36
Issue Date	1981-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31547
Type	bulletin (article)
File Information	31(2)_P25-36.pdf



[Instructions for use](#)

複雑労働論補遺

—W. リープクネヒトおよび

O. バウアーの所説によせて—

荒 又 重 雄

I

複雑労働の簡単労働への還元に関するマルクスの理論は、どのように解され、どのように展開されるべきか。この問題についてわたくしはすでに二つの論考によって自分の考えをのべた¹⁾。その中で、理論史的に重要と思われる先学の見解についても、できるだけ触れあるいは注記してきた。

ところが、最近、これまでわたくしの知らなかったもので、きわめて興味深い理論的事実を知りえた²⁾。問題についての拙論は、ベーム・バヴェルクのマルクス批判に反論すべく展開されたヒルファーディングの見解を直接の出発点とし、1920-30年代のソヴェト理論家に示唆をうけながらまとめられたものであったが、その当のヒルファーディングの見解をはさんで、ベーム・バヴェルクに直接に対決しようとした W. リープクネヒトによるマルクス展開の試みが先行し、また、ヒルファーディングの立論を批判的に継承しようとした H. ドイッチと、さらにはそれらを統合する O. バウアーの理論とが後続していたのである。そして拙論は、内容についていうならば、O. バウアーの見解を精密化したものと位置づけられておかしくないものだったのである。この間の理論史を最小限に整理しておく必要を認めたゆえんである。

- 1) 拙稿「複雑労働の簡単労働への還元の問題に関する試論」、拙著『価値法則と賃労働』恒星社厚生閣、1972年、所収。拙稿「複雑労働論再論」、拙著『賃労働論の展開』御茶の水書房、1978年、所収。

- 2) A. A. Вейхер, Сложный Труд, Ленинград, 1978 の巻末文献リストに O. Bauer の論文を見出したわたくしは、それが残念ながらモスクワで1925年に出版されたバウアーの論文集であったので、ヒルファーディングおよび O. バウアーについての気鋭の研究者である上條勇氏に相談した。すると氏は Neue Zeit 誌の中から該当するバウアーの論文を探し出し、これに仮訳を付してわたくしに提供してくれたばかりでなく、リープクネヒトの研究書の古い日本語をも指示してくれたのである。小論は、そのようなわけで、同氏の決定的な助力があつてはじめて成つたものであつて、ここに感謝をこめて事情を記する。

II

複雑労働に論及したウィルヘルム・リープクネヒトの著作は、1902年出版の Zur Geschichte der Werttheorie in England である。その中で彼がマルクスの理論を発展させようとするとき、批判せねばならない対象としてベーム・バヴェルク (Zum Abschluss des Marxschen System, Berlin 1896) があり、積極的な足がかりとして活用されたものに L. ブーフの研究 (Les v. Buch; Über die Elemente der politischen Oekonomie. Erster Teil: Intensität der Arbeit, Wert und Preis der Waren, Leipzig 1896. —なお、この書は同年ロシアでも, Бух, Л., Основные элементы политической экономии. Ч. I. СПб., 1896 として出されている) があつた。

リープクネヒトは、マルクスが抽象的人間労働をもって生理学的意味における人間労働力の支出なりとする、その点から出発している。これが、ブーフの次の命題に結びつけられる。曰く、「労働過程は先行せる食物及び吸収せられたる酸素のポテンシャル・エネルギーを機械的に使用することから成立つのである。」リープクネヒトは、のちのボグダーノフに流れてゆく抽象的人間労働の生理学的把握を展開するのである。次のごとくである。

「若しも我々が其の内容に従つて千種萬態であり得るあらゆる種類の労働に対して共通なる尺度を見出さんと欲するならば、この尺度なるものは新陳代謝によつて第一次的のポテンシャル・エネルギーとして人体の中に集積し労働によつて甬めて流出するエネルギー¹⁾だけである。」「我々はあらゆる勞

働過程が新陳代謝によって作出せられたる機械的労働のポテンシャル・エネルギーの変動を意味するということを知るのである。或生産物の価値は従って徹頭徹尾この物の生産に際して移転せしめられたるエネルギーの量によって条件付けられるのであるが、このエネルギーは又エネルギーで労働の持続力と労働の強度との二要素によって明白に決定せられるのである。労働の持続力が一定しているとすれば、労働は其強度に全く比例して価値を作出するに相違ない。労働の強度の大小とは如何なることを意味するものであるか？ 他なし人間の労働に於けるポテンシャル・エネルギーの移転の大小如何之れである。」²⁾かようにして、若干の混乱、つまりエネルギーを労働の持続と強度から規定しようとする混乱を含みながらも、リープクネヒトは労働をエネルギーに還元し、エネルギーから労働を規定しようとしている。

さて、リープクネヒトによれば、問題はその次のところで発生する。労働は色々であって、「甲のものはより多く筋肉の使用を必要とし、乙のものはより多く脳の使用を必要とすると云うが如きことがあるからである。」³⁾「鍛冶工は筋肉を甚だしく、之に反して裁縫工は主として脳、視神経他を使用する。」⁴⁾「労働は今や皆に其の容量に従って異なるばかりでなく、性質を異にせる労働でもあるのであって、マルクスは之をば単純労働及び複雑労働として分類している。」⁵⁾そして、マルクスは、生理学的意味での労働の概念に踏みとどまるべきだったのに、ここで別の説明を与えてしまったのである、と。リープクネヒトによれば、ベームによるマルクス批判は、複雑労働論に関するかぎりもっともなものであり、マルクスはむしろそのような概念をたてるべきではなかったのであって、抽象的人間労働の生理学的理解を一貫して、問題を労働強度の違いとするべきであったのである。⁶⁾

リープクネヒトの積極的説明は次のようなものである。⁷⁾「複雑労働は原則的に尋常一様の労働の場合よりも高級の注意と精神的緊張と『脳髓の消耗』とを惹起せしめると云うことによって単純労働と区別せられる。例えば宝石工や時計工や立派な機械工やの労働を挙げて見よう。是等のものの筋肉動作は紡績工、機織工等々の夫れよりも確に大でない。然しながら夫れに反して

是等のものの労働はより一層遙に顕著たる精神的緊張を必要とする、ただしその行為が紡績工その他のもの夫れよりも多種多様化し分化しているが故である。」紡績工の場合のエネルギーの消耗が純粹の筋肉運動に於いて四分の三起り、精神的緊張に於いて四分の一だけ起るとする。宝石工の場合は反対に、四分の一と四分の三だとする。そして、換算基準としての筋肉労働が兩者均等だとすると、前者の四分の三単位の労働と後者の四分の一単位の労働が等価となるから、後者すなわち宝石工の一単位の労働は紡績工の三単位の労働と同じであり、「宝石工の労働は、従って、同一労働時間中に紡績工の夫れよりも三倍の大きさに当る価値を」つくる。

リープクネヒトは、さらに複雑労働力の価値をも論ずる。「身体に対して大なる栄養品が補給せられない場合には、力のより大なる使用は長期に亘って行い得ないがゆえに、又この場合問題となるのは元々精神力の補充であるが故に、労働力の生産費に於ても亦一定の高等なる欲望即ち快楽の充足手段等々が計量せられねばならぬのである。宝石工、時計工及び機械工等は、實際、紡績工、機織工その他のものよりもより大なるエネルギーを消耗する。之れらよりもより高給の労賃によって、より佳良なる生活方法が起る場合に於いてのみこのことは長期に亘って起りうるのである。かかるがゆえに労働力の価値は、眞実、労働の複雑の程度に比例して、即ち労働過程中に労働によって樹立せしめられた価値に比例して定まる傾向を有する。⁸⁾」

複雑労働のより高い価値形成力と、複雑労働力のより高い価値とは、リープクネヒトによってこのように説明された。論証の流れをみるならば、抽象的人間労働をあくまでも生理学的にみることによって、一度はエネルギーという単一の物理量まで還元しながらも、かえって諸具体的有用労働の生理学的相違すなわちあるものは筋肉を余計に使い、あるものは脳髄を余計に使うといった相違にぶつかり、複雑労働と簡単労働の區別を諸具体的有用労働の區別に還元してしまっていることに気づく。リープクネヒトは、そのような相違をあくまで労働の強度の相違に還元すべく努力しながらも、さすがここで消費カロリーへの還元で説明するわけにもゆかず、エネルギーは何らか社

会的なものに戻りはじめるのである。この論理の先方には A. ボグダーノフの論理がひかえているとみてよいであろう。

R. ヒルファーディングは、自分の積極的な見解に近い将来に発表されるであろう、と予告しながら、リープクネヒトの上述のような見解を批判している。批判点は次のごとくである¹⁰⁾。複雑労働力の価値や複雑労働の生産物の価値を生理学的エネルギーから説明することはできない。土工はランカシャーの梳毛工に劣らぬエネルギーを消費しているが、労賃や生産物の価値ははるかに及ばない。教養だとか高度の生活要求だとかに依拠すると、必ず社会的契機に戻らざるをえず、生理学的見地を放棄しなくてはならなくなる。そもそも社会的な労働を生理学的範疇としてはならないのである。生理学的にみれば、動物の労働も人間の労働も同じではないか。労働が社会的な特殊な経済的範疇となるのは、社会の総労働が一つの統一体として看做され、個々の労働がその一部分とされるからである。全体すなわち総労働の一部分として、個々の労働は互に均等化されるのであり、これの共通尺度たる単純な平均労働は歴史的な一定の大きさである、と。批判は適切である。

- 1) リープクネヒト、八木沢善次訳、『英国価値学説史』、大正15年、222頁。
- 2) 同前、226頁-227頁。
- 3) 同前、221頁。
- 4) 同前、222頁。
- 5) 同前、223頁。
- 6) 同前、224頁-227頁。
- 7) 八木沢訳でみるかぎり文脈が乱れていて論旨は正確には把握しがたい。ここでのわたくしの解釈は、ある程度の推理を含んでいる。
- 8) リープクネヒト、前掲書、229頁-230頁。
- 9) 拙著『賃労働論の展開』、87頁-88頁。
- 10) ルドルフ・ヒルファーディング、「価値学説史について」、リープクネヒト前掲訳書所収、257頁-263頁。

III

O. バウアーの1905年の論文 *Qualifizierte Arbeit und Kapitalismus* (“Neue

Zeit” 24 J. G. Bd. 1. 1905/6) は、3章にわかれており、第1章は「生産過程における熟練労働」、第2章は「価値形成過程における熟練労働」、第3章は「労働力の価値」と題されている。問題に直接関係するのは第2章と第3章である。また、バウアーがここで念頭においているのは、R. ヒルファーディングの1904年の論文 *Böhm-Bawerks Marx-Kritik* (“Marx-Studien, Bd. I. Wien) と H. ドイッチ (Hans Deutsch) の1904年の論文 *Qualifizierte Arbeit und Kapitalismus*, Wien, である。バウアーの課題は、ヒルファーディングの問題解決方向を支持し、これへの部分的批判を提起したドイッチの意見をくみとりながら、両者間の論争を「調停」することである。第1章は、ヒルファーディングの議論と触れあうところのないものであるが、しかし、ドイッチの議論を直接にうけておかれている。第2章と第3章の区別についていえば、バウアーの頭の中で、熟練労働によって形成される商品価値如何の問題と、熟練労働力の価値如何の問題とが明瞭に区別されていたということである。だが、第1章と第2章の区別の中で、事実上労働の有用的側面と価値形成的側面が区別されているわけであるが、同じ熟練労働 (*qualifizierte Arbeit*) という語があてられ、複雑労働 (*komplizierte Arbeit*) という語はつかわれていない。

バウアーは、ヒルファーディング、ドイッチおよび自分自身の共通の立脚点をまずのべている。すなわち、熟練労働の概念は、労働者たちが社会的に平均的にもっているよりも、より長い即物的な (*sachliche*) 修業あるいはより大きな一般的予備教育なしにはできない労働、と規定される、ということであり、したがってまた、熟練度の差異というものは、労働の質の差異 (具体的有用労働からみたちがい——荒又) や労働の強度の差異とは区別されるものであるということである。¹⁾

バウアーによるヒルファーディング説のまとめは次のごとくである。熟練労働力が存立するためには、一連の簡単労働が不可欠である。つまり学習中の彼を扶養する労働と、彼を教育する教師の労働とである。これらの簡単労働が、一面では熟練労働力の価値を生み出し、他面では彼の労働力という使

用価値を形成する。後者の面では単純労働はさしあたり潜在的だが、熟練労働力が支出されはじめると、社会にとって顕在的なものとなり、価値を生み出す²⁾と。

ドイツは、バウアーによると、次のようにヒルファーディングを批判している。ヒルファーディングは教師が生徒達の熟練労働力を生み出すようにするが、熟練労働力は教師の労働の生産物なのではなく、生徒達自身の修業時代の労働の生産物なのである。教師の生産物は授業であり、生徒達は自分の労働力をもって授業を労働手段とし労働対象たる自分の頭脳、神経、筋肉に働きかけて熟練労働力をつくり出すのである。熟練労働力の価値には、労働力一般と同様な部分すなわち「再生産価値」の部分の他に、熟練労働力を特別につくり出すために必要だった「生産価値」の部分がある。後者には、織機の価値が織物に移転するのと同じように、教師の授業の価値が「移転された価値」部分と、自分が生徒だったときに自分自身によってあらたに「形成された価値」部分とがある。熟練労働力の支出によって形成される価値は、単純労働力の支出の全く同じ部分に、熟練労働力の「生産価値」のうち、労働者の平均的生存期間との関係で規定される一定の分割部分が加わったもの³⁾となる。

バウアーは、このドイツの理論を、複雑労働力による価値形成に関するがぎりほぼ全面的に支持している。これはヒルファーディング理論に対する根本的補完である。熟練労働によって生み出される商品の価値の中には、その商品の生産過程において労働者によってなされた労働と並んで、生徒や徒弟として修業していたときの教師の労働も自身の修業労働も算入される⁴⁾と。他方、バウアーは、熟練労働力の価値に関しては、事実上はヒルファーディングの方が正しい、とドイツを批判する。熟練労働力の形成のために生徒自身の修業労働が必要であるからといって、それが熟練労働力の価値になるとすることはできない。「移転された生産価値」は熟練労働力の「世代的再生産価値」とみるべきであり、これは熟練労働力の価値に算入されるが、あらたに「形成された生産価値」のいかなる部分も算入さるべきではな

い、と。⁵⁾ O. バウアーは、熟練労働の価値形成力と、熟練労働力自身の価値とを区別することによって、ヒルファーディングとドイツの論争を調停したのみならず、一方では生産過程の技術的高度化にともなうあらたな熟練労働者の発生、他方では医師のような専門家の報酬の労働力価値へ向かっての下落がみとめられる当時の状勢の中で、商品価値および労働力価値の理論を擁護していたわけである。

この点は、複雑労働の搾取率の問題にもからむのである。ドイツの理論もヒルファーディングの理論も同じく、複雑労働力商品の生みうる剰余価値の絶対量を単純労働力商品の生みうるそれと同じだとすることによって、複雑労働の搾取率を単純労働の搾取率に比して小さいものとみることになっているのだが、ドイツの理論は、あらたに「形成された生産価値」の分割部分を更に分母の側に加えることによって、O. バウアーの理解するヒルファーディングの理論よりもなお一層、複雑労働の搾取率を相対的に小さいものとみなすことになっている。バウアーは、複雑労働力の価値からあらたに「形成された生産価値」を除外することによって、教育労働についてはなお明瞭でないが、少くとも修業労働に関するかぎり、わたくしの所謂「潜在搾取率」⁶⁾の考え方に事実上たっているものであり、複雑労働の搾取率を単純労働のそれに非常に接近したもの、あるいはほぼひとしいものと事実上考えているのである。

- 1) O. Bauer, Qualifizierte Arbeit und Kapitalismus, in: Neue Zeit, 24. J. g. Bd. 1. 1905/6, S. 647.
- 2) O. Bauer, a. a. O., S. 647-648.
- 3) O. Bauer, a. a. O., S. 648.
- 4) O. Bauer, a. a. O., S. 649.
- 5) O. Bauer, a. a. O., S. 653-655.
- 6) 拙著『価値法則と賃労働』, 47 頁以下参照。

IV

O. バウアーは、上述の見解をうち出すにあたって十分に論理的であるわけ

ではない。バウアーの論理は、やや経験的であり、論理＝歴史説的である。

複雑労働力の支出の独自の価値形成作用を説明するとき、バウアーは次のようにのべる。「陶磁器絵付師の標準修業が、2年間皿に使用に耐えぬ彩色をすることであり、2年の実習ののちに販売可能の彩色をすものとしよう。とすれば、販売用の皿の製造のために社会的に必要な労働は、皿絵師の教育と実習に要求された労働のある割合部分だけ長くなることは確実ではないか？」。「もし陶磁器絵付師が自分の10時間の労働に対して10時間より少ない他人の労働を受けるとすると、彼は自分の息子を再び陶磁器絵付師にしようとせず、親代りの仕立職人か手袋職人のところに徒弟に出すだろう。ところで、陶磁器絵付師にとって『彼の10時間の労働』と見做されるものとは何か。各々の生産者が、自分がなしとげ、それをもって自分がある等価物を要求しようとする労働の中に、職業を学ぶために、またその職業の中で修業するために費やさなくてはならなかった労働をも算入することは確実ではないか。」「単純商品生産に通用することは、資本制生産にも通用する。」

バウアーの例解は、それ自体としては適切なものである。しかし、そこから、修業や教育に費やされた労働の独自の商品経済的意義についての考量が、ヒルファーディングを超えて展開されているわけではないし、直接的に価値形成的な労働と別に間接的に価値形成的な労働があることを認めているところから、さらにすすんで、間接的に価値形成的な労働の範囲について各個の複雑労働に即してでなく全社会的規模の視野での反省がなされているわけでもない。課題は沢山のこざれていたのである。

つづいて、複雑労働力の価値についてのバウアーの説明の仕方をみてみよう。論述はドイツへの批判としてすすむのであるが、まず一般に労働力の価値が、労働による価値形成と量において異なることの説明から出発する。次のごとくである。「労賃の高さはここではさしあたり一つの歴史的事実である。前代の労働貧民は彼らの労働力の再生産に要求される以上のものは決して受けとらなかつた。さて、生産諸力の発展は、資本家階級と労働者階級との間の価値生産物の分配にどのような作用を及ぼすだろうか。」労働生産力

の上昇は個々の商品の価値を低下させて貨幣賃金の購買力を高める。しかし資本主義下における労働生産力の上昇は資本の有機的構成の変化によって生ずるのである。もし単純再生産を前提すれば可変資本が絶対的に減少するから、貨幣賃金が不変であれば就業しうる労働者数が減少する。遊休させられた労働力はやがてより廉価で売り出されるから、結局、「資本の有機的構成の高度化の進展の総作用は、第一に貨幣の購買力の上昇であり、第二に貨幣賃金の引き下げである。労働者の状態は大凡において良くも悪くもならず、あらためてその労働力の再生産に必要な生活手段に制限されるのである。」⁴⁾ 拡大再生産についても事情は同じであって、資本の蓄積によって可変資本増大の可能性が与えられ、現実の蓄積は常に労働者人口の増加に照応するよう⁵⁾な形ですすむのである、と。

バウアーのこの説明は、労働貧民の生存費賃金を所与の前提とし、資本制的蓄積の進行の中で、産業予備軍の発生が労働市場における賃金低下力として作用しつづけるので、以後も生存費賃金が存続せざるをえない、というものである。剰余価値なしに資本はなく、資本制的生産は剰余価値生産であるから、あらゆる側面で剰余価値が追求され、したがって労働力価値が社会的に設定されざるをえないのだという一般論が、この説明の中には欠けているのである。複雑労働力の価値についての説明にうつると、バウアーの弱点はさらにあらわになる。

バウアーの説明は次のごとくである。「ドイツとヒルファーディングは、熟練労働者の賃金の中に一つの不変要因、すなわち、教師の労働によって生産され、養成された労働力に移転された価値がある、ということに関して同意見である。労賃の一部分は、それゆえ、可変資本ではなく不変資本を成している。労働力の高度の熟練は資本の有機的構成の高度化を意味する。より高度な有機的構成へむかっただの歩みは、つねに産業予備軍を生み出す。同じ資本は、もし賃金に不変要因を含んでいる熟練労働者を必要とするならば、ただ不熟練労働者だけを使用するときよりも、よりわずかの労働者しか就業させえないことは明らかである。しかし、この事実は少しも困難を意味しな

い。というのは、熟練労働力を雇用する必然性が、提供される仕事口の数を減少させるとすれば、それは他方では資本に差し出される『人手』の数をも減少させるからである。修業過程に見出される労働人口のかの部分は、労働市場にはあらわれない（あるいは自分の全労働力をもってはあらわれない）わけだが、もし資本がただ不熟練労働者のみを働かせておくことができたならば、彼らはもちろん労働市場に現われていたであらう。それゆえ、労働のより高度の熟練は、決して賃金圧迫的な産業予備軍を生み出しはしない。熟練労働者の労賃の不変的要因はむしろ熟練労働力のあたらしい世代の産出を確保しているだけである。⁶⁾

簡単労働力の価値に比しての複雑労働力の価値の大きさ、その差額が、次の世代の熟練労働力の産出を確保することになる、という論理は首肯しうるとしても、それを説明するために、複雑労働力の価値の中に不変資本に当るものがあるというドイツの理論をそのまま受け入れ、かつそのうえで労働市場におけるバランスの回復をいうために、一般に資本の有機的構成の高度化に関連して失業の発生を否認する「補償説」まがいのことをバウアーはのべるわけである。バウアーは、労働力の価値と労働力の支出によって形成される価値とを峻別することによって、ヒルファーディングとドイツとをともどもに克服しえたのであるから、ここでも、労働力価値の中に移転された価値を想定することを止めるべきだったのである。ここで徹底できなかったバウアーの理論の困難は、数字を利用した例解にいたるとさらに明瞭となる。

日々2マルクの労賃をうけとる50万人の不熟練労働者を就業させる100万マルクの可変資本があるものとする。資本が熟練労働力の雇用に移行するとどうなるか。「移転された生産価値」の分割部分だけ労働力価値が高くなり、2.5マルクになる。50万人の不熟練労働者を就業させえた資本も、こんどは40万人の熟練労働者を利用しうるのみである。しかし、これによって賃金圧迫的な産業予備軍は発生しない。というのは、同時に、10万人の人々が労働市場から引き抜かれるであろうからである。一部分は労働市場に熟練労働力とにあらわれる以前に、まず教育されなくてはならないし、一部分は

他のものの教育過程に仕事を見出すからである。ところがドイツによれば、「あらたに形成された生産価値」も労働力価値となる。そうすれば、この場合には賃金は2.5マルクではなくて、たとえば (etwa) 3マルクに上がるであろう。そうすると、資本が33.3万人しか就業させえないことはまちがいない。自由にされた6.7万人の労働者はどうなるのか。彼らに行き場所はなく、産業予備軍となり、賃金を2.5マルクに下げるしか道はない、⁷⁾と。

バウアーのこの定量的例解が、複雑労働に関する本質的な説明から必然的に流れ出る首尾一貫したものだ、とはとうてい弁護しえないのである。バウアーは、ヒルファーディングとドイツの理論を批判的に総合しながら、複雑労働論を一步前進させる重要な発言をなしたが、それは、ヒルファーディングも一応自覚していたところの、労働力の価値と、労働の価値形成力との区別を、一層するどく自覚することによってなされたのである。その一方で、バウアーによってあらたにひき起された混乱は、資本におけるのと同じように、労働力価値の中にも不変的要素がある、とのドイツの概念づけを無批判に継承したことに発していたのである。

- 1) O. Bauer, a. a. O., S. 649.
- 2) O. Bauer, a. a. O., S. 650.
- 3) O. Bauer, a. a. O., S. 651.
- 4) O. Bauer, a. a. O., S. 651.
- 5) O. Bauer, a. a. O., S. 652.
- 6) O. Bauer, a. a. O., S. 653-654.
- 7) O. Bauer, a. a. O., S. 654.